

武家名目抄稿

甲冑部十七

二十

和書門	二五二〇六	架	函	號	類
	七七				
四五六	甲中本	冊			

內閣文庫	和書
二五二〇六	架
四五六	冊
三四三	函
架	號

內閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (328)
函號	. 153 275



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





兜鉢

甲冑部十七目錄

武家名目抄稿第二十冊

顛六

天空

今无

真向

見上

見上板



眉庇

吹返

手先

母衣付

母衣付環

星

内兜

鍬



鉢付板

菱縫板

兜緒

忍緒

命緒

浮張 今无

甲ノ金物 今无

武家名目抄稿第廿冊

甲冑部十七

兜鉢

保元物語云ニノ五ウ白河殿攻落條悪七別當太刀ヲ抜テ

齋藤カ兜ノ鉢ヲ丁ト打

平治物語云五ウ待賢門軍條鎌田あり川をませさる

重盛にくやんとわちあひ重盛ちりけり

うれけりとや忍道者んうれをまて

田々甲北。も。ち。を。ち。か。く。く。は。ま。し。く。ゆ。
ゆる。写。り。ふ。く。を。え。く。打。き。つ。き。し。つ。く。
く。そ。志。め。く。ま。ま。り。

平家物語云 精舎 堂元の中へ 角井清妙明

秀と一人 因りの云そや我と必人々
を家つやえ糸せん 中 左刀をぬいて
たうく敵を大勢也 松原よりくは十文
言えくく之り 水車ハオすうきたた

里々りむふかき八人きりぬせ九人ふあ
敵り甲の鉢ふ餘にけく打あそりぬきの
本々里ちやうとねましくつとぬけく河へふ
とをいりふらる

その平家物語云 小坪 軍陰 ほか此次第ちか

ぬいそねちあひりりこのひ命をまげと
かぶとのきくをかくとうこせえん
引うせてみくとねましくかくれぬい

首をくく

源平盛衰記云

衣笠合戦條

十郎ニタン計隔テ

水車ヲ廻シ次第々々ニセメ寄テ矢倉ノ

内ハハ子入ラントスル所ヲ和田ノ小太

郎義盛十三策三伏シハシカタメラヲト

ニ矢ニヒヤウトハナツ金子カ掛タリケ

ル腹巻ノ一ノ板胄ノ鉢カケテカラトイ

又キ額ノ方ヨリヨトカヒノ下ヲツト通

リ鎧ノ胸板ノハ夕覆輪ニソイツケタル

云々

承久記云宇津宮四郎ガ卧タリケル甲ノ

鉢ヲ射ケヅツテ縫様ニ鉢付ノ板ニシタ

カニ射立タリ

太平記云唐崎濱合戦條播磨豎者快實遙ニ是ヲ

見テ前ニツキ雙タル持楯一帖岸破ト踏

倒シニ尺八寸ノ小長刀水車ニ廻メ躍リ

懸ル海東是ヲ手ニ受ケ。胃。ノ。鉢。ヲ真ニ
ツニ打破ニト隻手打ニ打
又云^{十四}頼貞四抑討手ノ大将ハ何ト申人ノ
向レテ候ヤラン近付テ矢一請テ御覽候
ハト云。終ニ十二束三伏忘ル、計引シホ
リテ切テ放ツ真先ニ進タル狩野下野前
司カ若黨ニ衣摺助房カ胃。マツカウ鉢。付ノ
板マテ矢先白射通メ馬ヨリ倒レニ射落

ス是ヲ始トメ鎧ノ袖草摺胃。鉢トモ不言
指詰テ思様ニ射ケルニ面ニ立ル兵二十四
人矢ノ下ニ射テ落ス

難太平記云友及家人村上平三と云。愛弓
ヲ知考テてけ。宵の。鉢。と。ろり。ゆり。を。取。お。

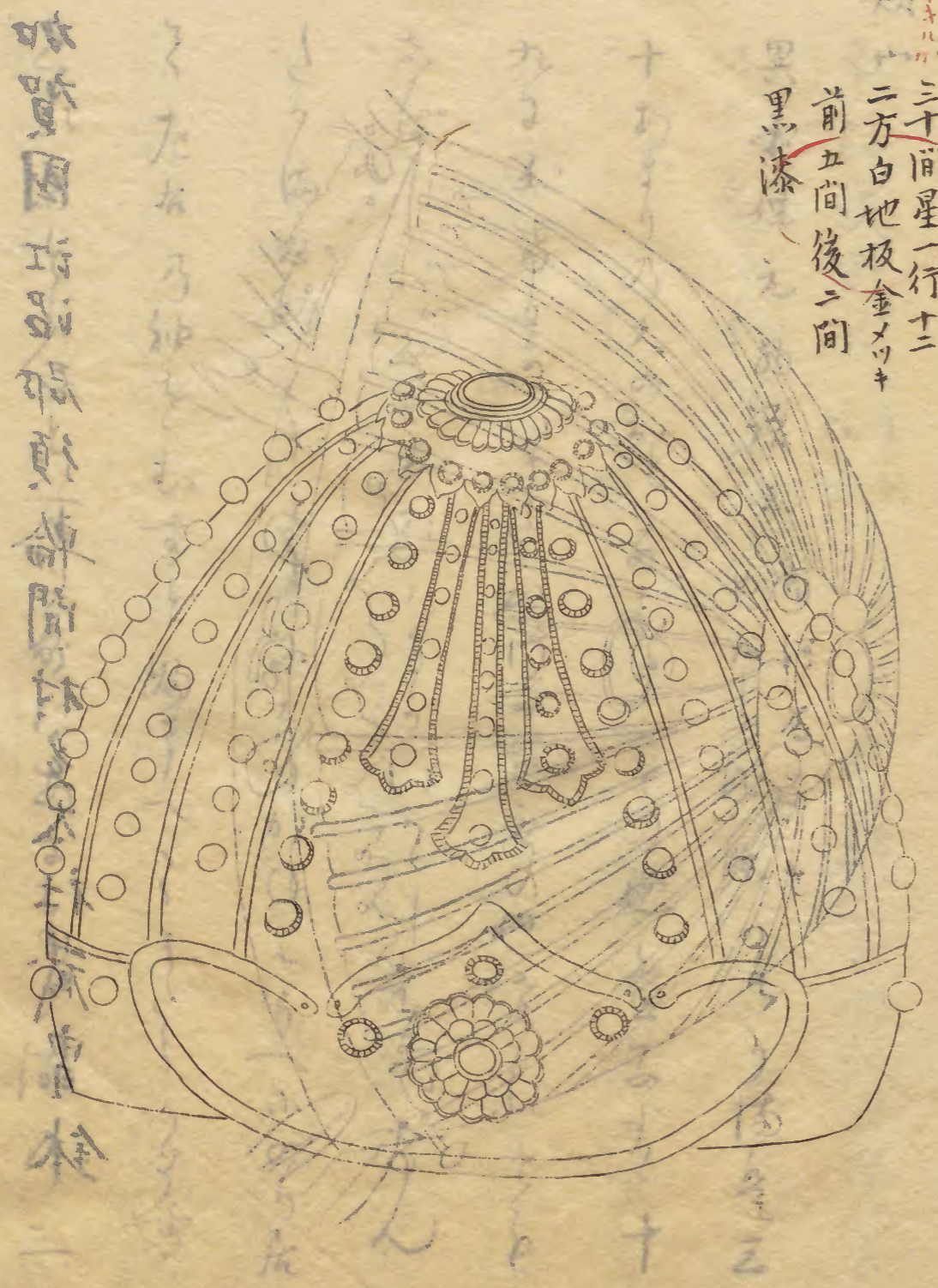
東遷基業云始糸糸記はわくろり。ゆり。の
先く。追。里。立。ゆ。さ。ろ。り。と。深。を。横。く。城。の

方へ押出す事子次等より内あり事等は
 八節多衝たまりうね城の内へ引入るを徳
 永晴より急ぐ也急正別に加勢の急ふつので
 吸入るしとすを何一堀よりう銃炮をるの
 ちくちくおくる一ある進る河村不取部門
 盛の秘をおぬき進う河村は保れざるを言
 事の多しうけあきう首領とる

武蔵國多摩郡御嶽権現社蔵曹鉢圖

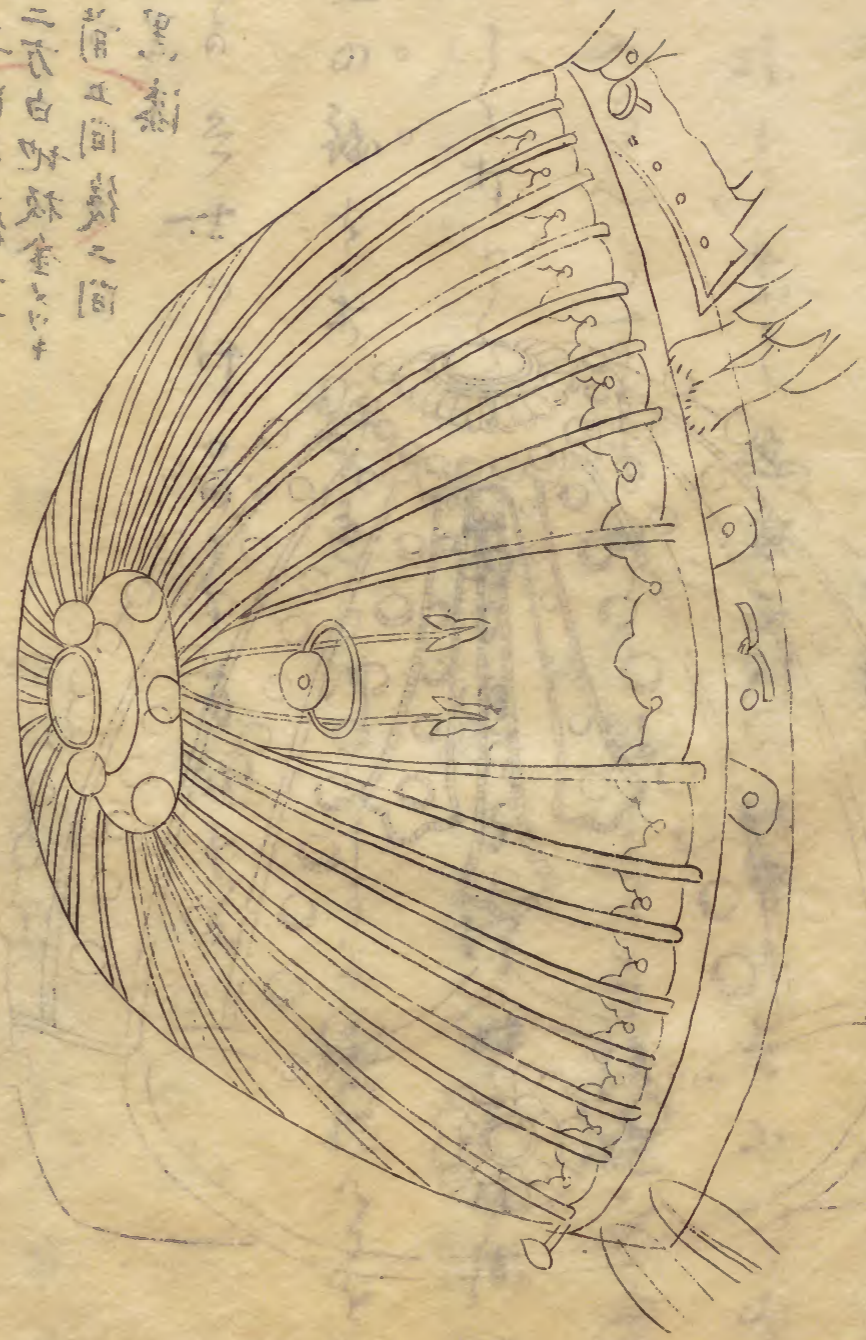
同蔵紫裾濃甲冑圖

顛（イキル） 三十間星一行十二
 二方白地板金メッキ
 前五間後二間
 黒漆



武蔵國多摩郡御嶽権現社蔵曹鉢圖
 同蔵紫裾濃甲冑圖

加賀國江沼郡須輪間村多太社藏曹鉢



白河をせ
 黒本保元
 十
 九
 八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 一

顛ハ

黒本保元
 十
 九
 八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 一

歸るよりとんてかりうろよりほくまの
了金より甲。共。て。為。之。よ。を。い。ひ。あ。を。の。け
むとす。ふ。し。の。終。こ。ゆ。い。く。も。る。刀。な。れ
は。志。し。あ。る。に。歸。り。の。し。を。を。し。也。あ。す
う。あ。る。三。歸。り。ゆ。て。共。多。智。を。む。す。と。ほ
う。ん。ろ。い。も。あ。す。あ。は。に。こ。し。か。ー。カ。三。カ。お
ひ。て。急。い。為。の。と。は。ま。の。中。ま。り

^{テニウ}平治物語云 ^{竹野門} 今小幡田うり人の所領所
^{軍除}

~~~~~大力のうりの老まや~~~~~りののまき。中  
それ。又。は。考。三。河。守。閑。ゆる。ま。や。ま。の。め。い。し。お  
ま。あ。ふ。を。ま。く。け。ら。ま。ら。ん。か。ま。あ。ら  
に。か。り。か。う。ふ。の。と。ま。ふ。く。ま。て。を。お。う。け。ん  
くと。は。つ。の。~~~~~に。あ。ま。は。教。置。も。甲。を。か  
く。ふ。か。あ。ま。し。ら。い。し。ら。せ。に。あ。ら。な。い。う。け。え  
つ。~~~~~か。ほ。の。ふ。て。ま。ふ。ち。う。け。~~~~~あ。い  
や。と。い。ま。と。け。ま。す。と。ふ。り。か。~~~~~あ。い



まはふやまきとくろいひかへくまむたの  
らぬやうりさむきりをもくそくそぬんす  
るとりろを新吾り合券新六おちかき  
なり〜余一うえひらのありひよぶふ  
ととよめかひよめてん。うまをへむす  
とむきあぢのけ〜ふか〜う道成りす(たむ)  
ハあもたまはにきんごり云々

十五  
義久軍両語云ゆのこのくたの任人とりか

の三郎景高くけ〜の生年十六むゆのてんと  
川くんとを〜た〜とありけたりハ  
こくハ〜や〜た〜ハ大北た〜るハやうと  
つゝをさえてす〜にあや〜り〜をむ  
さ〜れを解らとをさうちつ〜いおぬい  
い〜は〜たのま〜のあ〜りふ〜らふ  
〜す〜ら〜る〜を〜人〜と〜  
〜ためて〜に〜を〜け〜あひと〜

返すおとにうけたりやうをたがもりて  
うんそくをとりり

太平記云 三月十二日合戦條 木寺相摸ハ逆巻水ニ馬

ヲ被放テ胃ノ手及計僅ニ浮ニ見ヘケル

カ波ノ上ヲヤ浮游キケン水底ヲヤ潜リケ

ン人ヨリ前ニ渡付テ河ノ向ノ流洲ニ鎧

ノ水瀝テソ立タリケル

又云 住吉合 其次ニ一人是モ法師武者ノ

戦條

長七尺餘モ有ラント覺タルカ阿間了願

ト名乗テ唐綾威ノ鎧ニ小太刀帶テ柄ノ

長一文計ニ見ヘタル鎧ヲ馬ノ平頸ニ引

副テウシモ不凝議懸出タリ其勢ニ事カ

ラ尋常ノ者ニハ非スト見ヘナカラ跡ニ

續ク勢ナケレハアレヤト許云テ山名カ

大勢ウシモ驚カラ整タル中へ只二騎ツ

ト懸入テ前後左右ヲ突テ廻ニ小手ノ迦



し北極のせんらんつるをーまうむあいの  
まん中々ますりたは一の板を二の板を  
矢つたをたーふあう仕らんときもて  
にふれをいひる

<sup>ニノサウ</sup>平治物語云 美野あふもの 源内を割さる

と云ものるる巻五うちふせのちりまは  
しでかけぬらすけなをえまりの口又  
矢射かちうとをハしめやせと六をう

うりゆかふれはとすそにいと死かろー  
まらんとーれはにむけまりをちうくのま打  
ふ志とうれはをさるるをいるるまうり。  
二しふあまのけふあをさるるに  
り

平家物語云 本巻巻 本巻後内甲を射させ

痛手なれ甲北を甲を馬の首に刺さる  
は備後あを石田の師等二人と居て本巻

坂の尻頸を以て終ふるこゝを終つてくまなり

其在本年秋物語云 萬仲器後 馬もをけり

えいりりねぬもつうれを身もひうすあり

ともろのハつくらんと思ひてうーろを

みうりたりも成る久よまそのめりりれを

木骨のうち甲又射つけたり甲のあり

を馬のうーにありありにあり

遊久軍物語云内なる命やうすありま

う。う。のまつきいさせく血目りたりり入ル

をとも云く

太平記云 類員回 抑討手ノ大将ハ誰ト申

人ノ向レテ候ヤラシ近付テ箭一請テ御

覽候ハト云終ニ十二束三伏忘ル、計引

シホリ切テ放ツ真前ニ進タル狩野下野

前司カ若黨ニ衣摺助房カ胃。ノマツカウ。

鉢付ノ板マテ矢先白ッ射通ノ馬ヨリ倒



ニ射落ス

又云<sup>三ノ六ウ</sup>軍條木戸ノ上ナル櫓ヨリ矢間ノ板

ヲ排テ名乗ケルハ三河ノ住人足助次郎

重範忝モ一天ノ君ニタノマレ進ラセテ

此城ノ一ノ木戸ヲ堅メタリ<sup>中</sup>甲ノ真向

ヲ射シラニニナトカ碎テ通ラサラニト

思案ノ胡録ヨリ金頭ヲ一ツ拔出シ鼻油

引テサラハニ矢仕リ候ハニ受テ御覽

候ヘト云俛ニ且鎧ノ高紐ヲハツシテ十

三束三伏前ヨリモナヲ引シホリテ手答

高クハタト射ル思ク矢坪ヲ不違荒屋<sup>尾</sup>弥

五郎カ甲ノ真向金物ノ上ニ寸計射碎テ

眉間ノ真中ヲクツマキ責テクサト射籠

タリケレハニ言トモ不云兄弟同枕ニ倒

重テ死ニケリ

又云<sup>九</sup>久我暇赤松ノ一族ニ佐用<sup>ヨ</sup>左衛門三

郎範家トテ強弓ノ矢継早野伏戦ニ心キ  
キテ阜宜公カ秘セシ所ヲ我物ニ得タル  
兵アリ畧中尾張守ハ三方ノ敵ヲ追マクリ  
鬼丸ニ著<sup>ツキ</sup>タル血ヲ笠符ニテ推拭ヒ扇開  
キ仕フテ思フ事モナケニ扣ヘタル処ヲ  
範家近々ト子ラヒ寄テ引ツノテ丁ト射  
ル其矢思フ矢坪ヲ不<sup>レ</sup>違尾張守カ冑ノ真  
甲ノハツレ眉間ノ真中ニ當テ脳ヲ碎キ

骨ヲ破テ頸ノ骨ノハツレヘ矢サキ白ク  
射出シツリケル間サシモノ猛將ナレ共  
此矢一筋ニ弱テ馬ヨリ真倒ニトウト落<sup>ル</sup>  
又<sup>廿四</sup>云箱根竹下中ニモ道場坊助注記祐寛  
ハ兎十人同三十餘人紅下濃ノ鎧ヲ一様  
ニ着テ兎ハ紅梅ノ作り花ヲ一枝ツ、甲  
ノ真額ニ挿タリ  
又<sup>十七</sup>云山門冑ノ真向ヨリ眉間ノ脳ヲ碎テ

鉢付ノ板ノ横縫キレテ矢シリノ見ル計

= 射筈タリ

又云<sup>三十一</sup> 武藏野三陣ニハ花一揆命鶴丸ヲ大

將トシテ六千餘騎萌黄緋威紫赤卯ノ花

ノ妻取タル鎧ニ薄紅ノ笠符ヲツケ梅花

一枝折テ甲ノ真向ニ差シレハ四方ノ嵐

吹度ニ鎧ノ袖ヤ白ヲラン

伯耆ノ巻云長壽大子此城戸へ行向テの程

を又終一敵を数多討捕淨方ハ多原そあり

とより敵々之河計引退支息迄記居より

ル至甚長ハ父の命ニ向テ被テける何と

て是ヲ仰向ハ候リ仰希も仰聞本マくは度から

ん事ハ被テハ元是末ハかみゆきとも今

日の言我を不覚一ても何のりをも可期そ也矢

一川射テ可敵と宣ひるる事ハ流言ト知

事能く今ハ免も争と討死せもや者とも

とく家、うう其間矢ころと毛、きよ下  
松口見給へハ楯のまろさふ四方向の甲着  
たる者あり田所、背五命た開門射様直  
と云者也長言是を足給く例のたう弦念  
一免一申免、つらむ、引ひやうと  
射る様直、楯乃引左つと射通、一後、續  
し、勢乃命、甲のすか、信、又矢、付  
射出、一うり三人、居た、此、又、事、記

関東兵乱記云 加鳥合 原美濃守ト云モノ

紺糸ノ鎧ニ半月ノ、間計、一、出タル

サシモノニテ甲ノマツカウニ原美濃守

平虎胤ト書テ猪クニキフテノ馬ニ乘

太刀ヲ抜テ切テ入

按軍器考云今ニ武士の朝服令集の日  
は朱の抹。取。挂甲を加ふ、一と云えきり  
抹取、とりふハ、即ち、飾、色、と、いふ、もの、あり

るなり 兎の都之より なるを 倭より  
うとしむる 志向の 字なりと 用ひ 亦此の 由  
ふとし 牀敷と しふは 此の 兎も うしむを  
ししなり

見上

十六 甲陽軍鑑云 具足昇出付 サキニ昇出ル人

飯ヲ甲ヲ持出テ 御目ニカクル也 持ヤウ

ハ左ノ手ニテ 忍ノ緒ヲカイタクリテ 右

ノ手ニテ コアケノ 右脇シコロノ 右ノサ  
キニソ、  
カクル也

見上板

武者相語云 向井能定守とよ 待めがらう

きりうはて 死をきく 顔をしるきて 死

をのきふせう 右北あー して 敵のまきうて

をゆき して 志いふを かくこ あげまがめ

とぶえをい〜きりて次〜をさ  
うてふお〜えあけの板をえ首をかき切と

の也

眉庇

會津陣物語云政宗自身乘着左内カ總角  
付ラニ刀タ、ミカケテ切付タリ左内キ  
ツト驚フリ返リ鐔元迄血ニ成タル二尺  
七寸ノ貞宗ノ刀ニテ片手打ニ丁ト切政

宗ノ胃ノ眉。日。サ。シ。ヨリ膝カシラ鞍ノ前  
輪カケ切先ハツレニ切付云々

吹返

源平盛衰記云屋島合越中次郎兵衛盛嗣  
折ラ得タリト悦テ大將軍ニ目ヲ懸テ熊  
手ヲ下シ判官ヲ懸ント打懸ケリ中小林  
神五宗行ト云者アリ大將軍ヲ縣サセシ  
トテ續テ游セタリケル程ニ事由ナク上

り給タリケレハ盛嗣判官ヲ懸ハツシテ  
不安思ヒ游艇ニ乘移指寄テ宗行カ胃ノ  
吹返ニ熊手ヲカラト打懸テ曳音ヲ出シ  
テ引宗行鞍ノ前輪ニ強取付テ鞭ヲ打主  
モ究竟ノ乘尻也馬モ突ニスクヤカ也  
太平記云<sup>九</sup>山崎尾張守ハ<sup>中</sup>花曇子ノ濃紅  
ニ染タル鎧直垂ニ紫絲ノ鎧金物重ク打  
タルヲ透間モナク著下メ白星ノ五枚甲

ノ吹返ニ日光月光ノ二天子ヲ金ト銀ト  
ニ掘透ノ打タルヲ猪頭ニ着成シ云々  
又云<sup>六</sup>波羅<sup>武部七郎</sup>妻鹿カ鎧ノ上帶ヲ  
踏テ肩ニ乘揚リ一列々テ向ノ岸ニ着  
ケル妻鹿カラ<sup>ハ</sup>ボト突テ御邊ハ我ヲ橋  
ニノ渡タルヤイテ其堀引破テ捨ニト云  
終ニ岸ヨリ上ヘット刎揚リ屏柱ノ四五  
寸餘ヲ見ヘタルニ手ヲ懸エイヤエイヤ

ト引ニ一二丈ホリ拳テ山ノ如クナル揚  
土壁ト共崩テ堀ハ平地ニナリニケリ是  
ヲ見テ築垣ノ上ニ三百餘箇搔雙ヘタル  
櫓ヨリ指攻引攻射ケル矢雨ノ降ヨリモ  
猶滋シ長宗カ鎧ノ菱縫甲ノ吹返ニ立夕  
ル矢少々折懸テ高櫓ノ下ヘツト走入リ  
雨金剛ノ前ニ太刀ヲ倒ニツキ齒咀メ立  
タルハ何レヲ仁王何レヲ孫三郎トモ分

兼タリ

又云<sup>十七</sup>山門攻條定範得タリ賢シト長刀ノ柄ヲ

取延源ハカ甲ノ鉢ヲ破ヨ碎ヨト重打ニ  
ッ打タリケル源ハ甲ノ吹返ヲ目ノ上ヘ  
切サケラレテ着直サント推仰キケル処  
ヲ云々

高者相伝云左馬助殿之少いして三人ともふ十三  
来ニ伏しつゝうたつゝふつゝ死し〜



そふし水々々々は西宗のあめくしといふも  
もふしをいふも——同くは源兵  
来りきりぬ甲は吹通——をいふも——あま  
るは柳り——をいふも——  
ちあくをぬけぬ

佐竹宗之関孝玄甲冑を録よは流の附中甲冑  
角櫃の蓋より射をぬけぬ  
時た右のふく——あるは袖乃りふらりし

一之海國神史本篇長巻神皇正統記

や由の法をとりくしてた右のふはたす  
ふたう——を押して持置わたりし  
腕よりけたるうたひをぬきし  
はへぬるるる

<sup>正</sup>續武家閑侯云輝源賢内者之水は寄先の太竹  
のふくぬきしをいふも——  
のふくぬきしをいふも——  
り吹りしをいふも——

手先



山城圖鞍馬寺藏義經朝臣吹返圖

武將記云甲亥吹返。及ノ金物并ニマツカウ  
 ノ金物合テ三不打是ハ代々相傳スル甲  
 無者也

半井本保元物語云大炊御門カ末南へ向  
テ固メ給ハ源氏カ平氏カカヤウ申ハ下  
野守殿ノ御乳母子鎌田次郎正清也ト申  
ケレハ是ハ筑紫八郎為朝也汝ハ一家ノ  
郎等コサレナレサコソ日ノ敵ニ成共争  
カ己ハ相傳ノ主ヨハ可計ソ引テノケト  
ソ宣ケル正清浅笑テ詞モ夕一ハワス申  
ケルハ日來ハ相傳ノ主只今ハ八逆ノ凶徒

也正清ハ副將軍ノ宣旨ヲ蒙タリ相傳ノ  
主ノ御身ニ郎等ノ射矢ハ立ヤ不立ヤ試  
給ハ此矢ハ正清カ射矢ニ非ス伊勢大神  
宮正八幡宮ノ御矢也トテ我詞ハテナハ  
此君ニ射ラレ奉ナンヌト思テ一ノ矢ヲ  
放ケレハ御曹司ノ左ノ顔崎ハツフリノ  
間ヲ射消リテ甲ノ手崎ニシタカニ射  
付タリ

平家物語云 いさな川 むうひのきしーしを山向  
の二島うも多川矢にもけ山馬の刻つてを  
のうふいせせぬまは 河中うりゆんは  
えをつつをうまうりいし強うまのま。  
まき まき ともしーけあれとも事ませ  
す水此ういふくけりむついのきしー  
そは あま なる

又云 橋を 奪り 兼園房阿闍梨 兼秀の石は  
戦除

うひうる一東法師とふ大力の劉の老浄  
州唐ううに續いし戦あうの行柄ハせ  
いしそはとるへき後ハあし浄州唐う甲の  
ま。たにまをたしあし浄州唐を三層  
を法んとをわり越えそまわいなる  
まの平家物語云 乃橋山 兼秀の此文三  
まああゆまゆまける小 中 矢一さちま  
まののましーの中まをぬきあしまぬま

めろろふ十三そくをよむまをぬりけきか  
ふしのもさたをぬはれぬ

母衣付

言彼子云并是をうくまゆり  
にまゆりうきりうとう甲  
まゆり切つてうきりう  
付。まゆりうきりう  
うきりうきりうきりう

母衣付環

まゆりうきりうきりう

見ゆ難録云山吉孫次新橋家、長柄、者  
をぬりと抜き倒し血眼をぬり星白乃甲  
をぬり母衣付乃環、糸記、る敵、持  
鬼柴田とてあゆり十人も亦人、突掛、生  
元吉、知と、玄、程、うと、あま、山、吉、方、き、は、港、ふ  
まは、ぬ、白、し、紐、引、抜、く、く、抜き、立、く、ゆ、り、者



なつてハあて矢一もふりりさる

平家物語云 頼朝 名 白山ニ之仕ハ院の大衆ト

とくくちりあひ知左との勢ニ子孫人同セ

月九日乃等言小因代所經り彼ちがうそ押寄ルル

とりきぬゆりのいとと定る其りたをせとゆ

つり露をた流ハ枯田をむけの袖をひき出し

を井をてては稲妻ハ甲の星をうやうす因代り

あはしとやあしんすん殺すけかしとあ人のあ

ゆの卯乃刻ハ押して園をとんとを継ぐ

とハ平家物語云 言 徳 寺 伝 川 俊 條 亦多うよ

山田次郎ハ那言あゆりまきりけり川をた

富山ハ馬の額ふりうたけりわくまきり馬よ

りけきを流さしとありまきり水ハまじ

庭ハふり甲はをあしとせと

るり

<sup>七一</sup> 太平記云 吉野城 元弘三年正月六日二階

堂出羽入道々蘊六万餘騎ノ勢ニテ大塔  
宮ノ籠ラセ給ヘル吉野ノ城へ押寄ル菜  
摘川ノ川淀ヨリ城ノ方ヲ見上タレハ嶺  
ニハ白旗赤旗錦ノ旌深山下風ニ吹ナレ  
カサレテ雲放花放ト怪マル麓ニハ數千  
ノ官軍甲ノ星ヲ耀カシ鎧ノ袖ヲ連子ヲ  
錦繡シケル地ノ如シ云々

又云 <sup>廿一ウ</sup>武藏野 義治ハ太刀カケ草摺ノ横縫  
合戰條

皆突切レテ威毛計続タルニ鍬形兩方被  
切折星モ少々削ラレタリ太刀ハ鐔本打  
折又

内兜

保元物語云 白河原と義経夜 川島に矢ニツ

ち多川 兼中 外は 誰とハ志ハ 矢ハ 中々に

さへ なる者ニきいかとん 以帝を 佐門中甲

をいせしきり 志りきり



又云 同 けいふの朝てたの勢ありまふれを大  
將 義経 大の男の大きふるふい集りり人りまを  
らきて 軍けちせんともつりまありきふ  
固くふとまふにいけふ人り道と祈ら  
ふ家のさいふいりともりまふり人の  
大矢を打たうひたし一矢ふいかとんと打  
上りまのまふり志けりう矢とる男のまふ  
りふまふりちい回乃いりまふれ我をぬん

くまへ集りんあんちまけこの免たすけ我をけ  
いふちをのまふりやまふり又まふり  
いふふまふりんと志あんとつりまふり矢  
をさしちりするんまふりの程こそ志んつり  
あつ  
平治物語云 ち波西うの 敵こまふり是まを  
うんとうけまふりまふりまふり  
ふすまふり我をまふり引まふり

矢あやまらぬ内。甲子之くさよりかんさう  
す南にわらうきはぬの二まはるをねん  
うけさるる

<sup>四</sup>年家物語云 定以辰 修條 上総ちり別官の射ら

る矢に源ちまあま由。甲を射るやうなる

もましと総ちり幸次命丸とりふ大あう

乃劉の者崩黄うむの鎧若三枚甲の指を

しめ云く

その年家物語云 源三位入道 又子有實條 ちり 徳を

見くうくちきくわらうりう境いかにあ内。

かふともわらうすう ちりむやうにちるる

ころと云く

<sup>十二</sup>源平盛衰記云 宇治合 戦條 足利又ち郎真先カ

ケラ下知シケリ余リニ アヲノキテ内甲。

イサスナ余リニ ウツフキテテヘニイサ

スナ鎧ノ袖末額ニアテヨ云々

梅香痛云細川常刀先生黒馬にそまふり  
ゆる城戸みま付くゆるゆる回。宵子志をり  
ふむとは馬も数ヶ所まらきゆるまをま  
寺にゆきまら途を相違あふり

太平記云 唐崎濱 戦條 二ノ太刀ヲ餘リニ強ク

切ントリ弓手ノ鏝ヲ踏ヲリ己ニ馬ヨリ

落ントレケルカ乘直リケル処ヲ快突長

刀ノ柄ヲ取延内。甲へ鋒キ上ニニツ三ツ

スキ間モナク入タリケルニ海東アヤマ

タス喉フエヲ突レテ馬ヨリ真倒ニ落ニケリ

宝町及物語云の智ハカク坂本の城へも籠ら

んと。之は。騎<sup>ニ</sup>馬を山科越り曉ヶけり。其所子郷

人岩のうらも鏝まらほれたまを充考内。甲。

へつこころくちりの子たれハ馬より籠る

をを云く

鍛

鍛

保元物語云 白河屋をせ 正法なるき斗まてお

先か定まらぬ條

一ふせくし 正法なるき斗まてお  
人うまに 正法なるき斗まてお  
のらうあうこをん 正法なるき斗まてお  
をハ川ありそけしもの久はとやハハの  
君ふもを今ハハやくのけしとありし  
よく乃人くうちぬし言はせよや者せと  
つひもきこ 正法なるき斗まてお

乃もつかりにかつとめしとてうやまの志こ

はい付り云々

<sup>ナ</sup>平治物語云 ふ波 ぬら 源太のうひ

今日ふそくし 正法なるき斗まてお  
おしきすめや考せとそらまやのえ  
五十と記志こをうさけくハハ  
の估をたうこを川とそらなる

平治物語云 瀬尾 最 瀬尾を命をいとき

矢倉よりけりより大なるを揚ぐ 去五月  
と甲斐の命を賜らばすいせて候者  
乃若志には是をく用急仕向て候へ  
せしつめひをつめあくは射る今井に命  
官候三命海空を月詠方海軍を以て一  
人高子乃をせ是故事ともせん甲の殿を  
傾け射殺せり人をもはより入川に堀をう  
め云々

その本平が初語云 橋名 我條 明後矢をこしをり

し 中 畧 のむ せ の さ や さ の さ 左のり

きふかむをきんてぬむけは神をゆりあを

せし甲北志をうさふけて橋のりき

をとりりゆり敵を百さう中へ向へ入る

り

み云 悪七多御 耐水保 玉甲 鉢付 引切條 くのうけより大のがしこ

の大あまきかきこりあけりむい水保危り



ヲ傾テ馬ヲ立納メ閑コリ却テ罄ヘタリ

ケル

又云 大渡山崎 新田越後守義頭後陣ニ引

ケルカ三千余騎ニテ返合セ相撲カ过テ

陣ニ取テ旗ヲ颯ト指揚タリケレ共 中義

頭打破テハ圍ヲ出取ニ返テハ追退ケセ

八度マテ自戦レケルニ鎧ノ袖モ冑ノシ

ゴロモ皆切落サレテ深手アマ夕所負テ

ケレハ半死半生ニ切成サレテ僅ニ都ヘ

歸リ給フ

又云 武藏野 義興甲ノ綴袖ノ三ノ板切落

サレテ

小條五代記 清水左衛門 甲北志 左衛門

人々引ク一鞍の中人痛ニテ付録者不

世 左衛門 有ふぬち首 左衛門 射

と云々大カの名をえり

會津陣物語云片倉手ニ付タル兵氏堀下

迄心懸詰掛候一トモ召出シノコトクニ

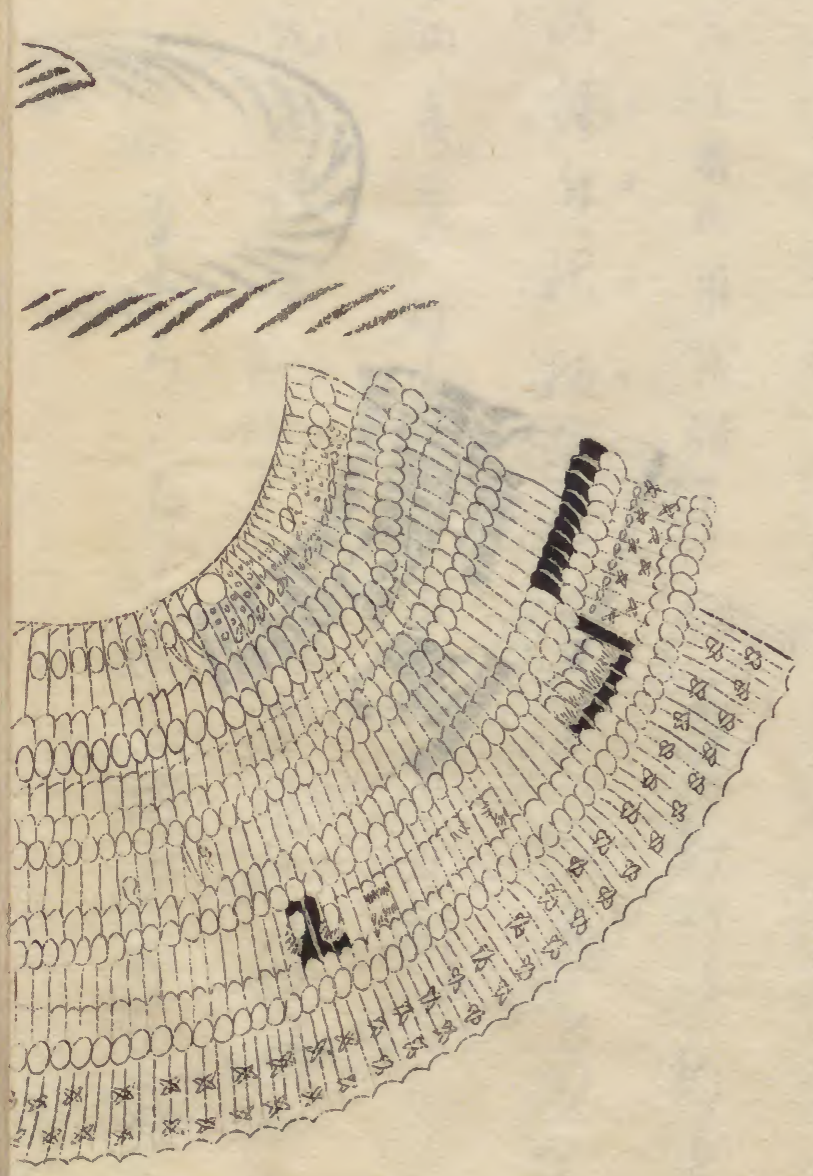
十人計鉄炮ニ打倒サレケルハ皆鞆ヲ

カサムケコトツ、不進得

*[Faint background text, likely bleed-through from the reverse side]*

出雲園日御碕神社蔵鞆圖

*[Faint text below the title]*

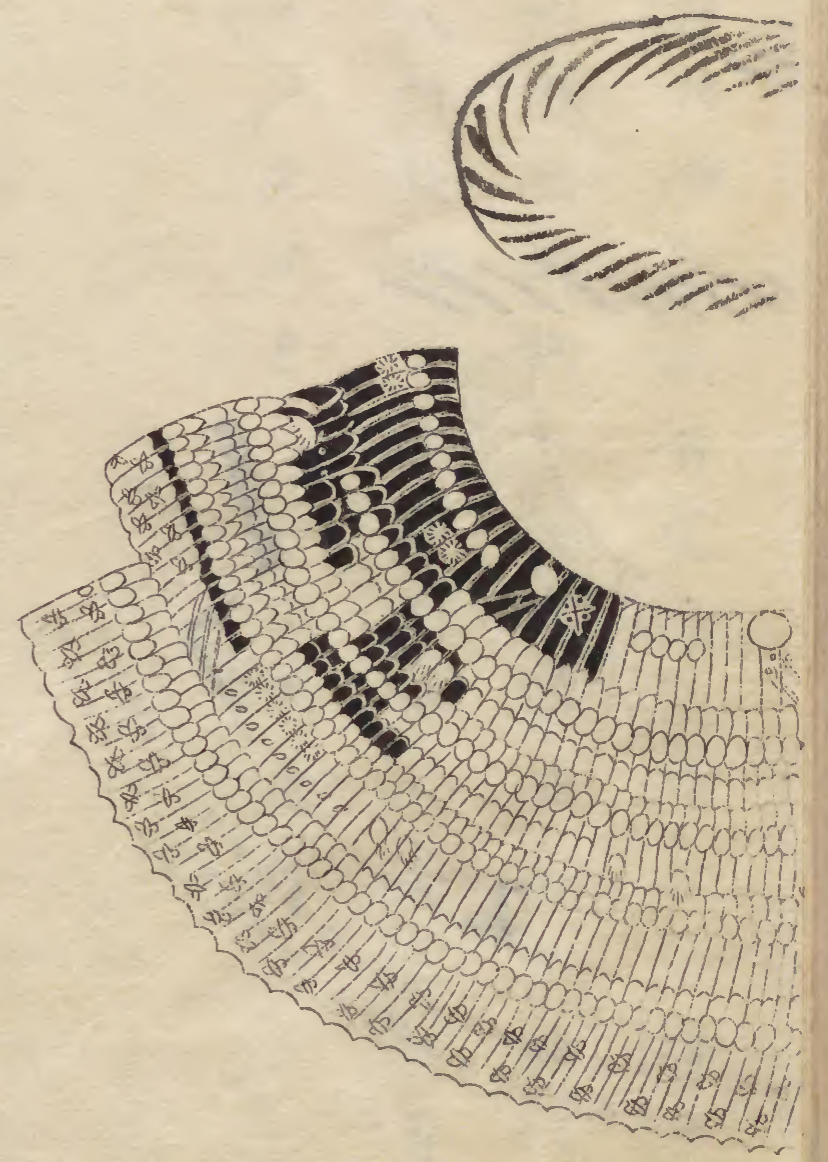




鉢付板

奥羽後三年紀云相摸乃國臣人鎌倉の控り命

出雲國日野郡新井村海鏡園



系正といふ者あり先祖より國を治るるは  
えとのかり年々くくろふ十六歳より大  
軍乃あふあま命をまゝ、年々あふ征  
矢ふて右の目撃討たせ川首を討つめきくか  
との鉢付板に討つらまぬ矢をちるけ  
面のみを討つ敵を討つり川  
保元物語云 白河原をせ  
めせしは 條さうまろ西の任人  
大倉の平ちりけり 田之命けちりま

さねよきんてーあふ八まん及う此三年  
此せんよ出相ふうかさいの城をせ免後い  
と此十六さいくーいこのやんをたけ  
多れうこのりこ命ふ左のまふふを申のまぢ  
付の板うぬ付られだりの矢をいうー  
其うこきをるー海原北槍西命ーけぢ  
まのえり大屋の平ちうけちのとらあ  
つー

異本保元相法云

正傳向  
船陣系

此やハまさ記より

をふりよあは八まん大いものともちう  
此やあふーとて了ふよこのー此やと  
ぬるためともうまをえんとふりあをのま  
いひり此あふたをわけつりてうふの  
まぢつぢのいこまあうりみとのつけ  
い

<sup>十八</sup>平家物語云 二 梶原経高 一 たり大

幸と云ふを搦る幸八幡屋の後三年の心裁に  
出羽國千鶴を厚成を交結し一時生年十  
六歳と名乗つてまをけり子此眼を海付  
の板り射付らるるさうさうをぬくさう  
のさをも射敵射る一勅賞さぬさうさう  
後代の上り一強食権を市景ふのまを握  
る平三多射とて一人あふのさうさうや我と  
思ふ人さうさうありあへんさうさうとてたの

いゝかく

源平盛衰記云 源平侍共軍條 盛繼判官ヲ懸弛シ

不安思て游艇ニ乘リ移リ差シ寄テ宗行

カ甲ノ吹返ニ熊手ヲカラト打懸テ曳音

出シテ引ク 中宗行熊手ニ被懸ナカラ馬

ヨリ飛下リ貫帶タリケルカ沙ニ足ヲ踏

入レツ、頸ヲ延テ曳々ト引タリケル

盛繼モ大カラ宗行モ健者勝劣イツレモ

不見ケリ金剛力士ノ頸引ト覺ヘタル西  
方ツヨク引ク程ニ鉢付ノ板クツト引切  
リ鉢ハ残ラ頭ニアリシコロハ熊手ニ留リ又  
又云土佐坊上洛條伊豫守引退テ差詰々々射ケ  
レハア夕矢ナニ寄手モ矢前ヲソロヘテ  
射ケリ源八兵衛尉廣綱ハ内甲ヲ鉢付ノ  
板ニ射付ラレテ馬ヨリ落テ死ニケ  
リ

<sup>下ニテウ</sup>承久記云熊谷次郎兵衛申ケル、ハニ  
事ヲキルヘキニモナシ各休給ヘトテ河  
端近ク打卧様ニ鎧打羽フキラ皆臥タリ  
サシトモ猶敵ハ射止事ナシ宇都宮四郎  
ガ卧タリケル甲ノ鉢ヲ射ケヅテ縫様ニ  
鉢付ノ板ニシタ、カニ射立タリ  
太平記頼員回忠條真前ニ進タル狩野下野前  
司カ若黨ニ衣摺助房カ胃ノマツカウ鉢

付。ノ。板。マ。テ。矢。先。白。ク。射。通。メ。馬。ヨ。リ。倒。ニ

射落ス

又<sup>十七</sup>云<sup>山門</sup> 冑ノ真向ヨリ眉間ノ腦ヲ碎テ

鉢。付。ノ。板。ノ。横。縫。キ。レ。テ。矢。シ。リ。ノ。見。ル。計

ニ射籠タリ

又<sup>廿八</sup>云<sup>三角入道</sup> イサヤ事、難儀、  
謀反條

前ニ此城ヲ夜討ニ落シテ敵ノ氣ヲ失ハ

セ宰相殿ニカヲ付進セ<sup>レ</sup>ト申ケレハ此儀

尤可<sup>レ</sup>然サラハ手柄ノ者共、

六千餘騎ノ兵ノ中ヨリ世勝タル剛ノ者

ヲユリ出スニ<sup>中</sup> 八月廿五日ノ宵ノ間ニ

エイヤ聲ヲ出ノ先立人ヲ待調ヘサセ

筒ノ火ヲ見セラサカル勢ヲ進マセラ城

ノ後ナル自深山<sup>ニ</sup> 匍々忍寄テ薄苧萱篠竹

ナントヲ切テ鎧ノサ子頭冑ノ鉢。付。ノ。板。

ニヒシト差テ探竿影草ニ身ヲ隠シ鼓カ

崎ノ切岸ノ下岩尾ノ陰ニソ卧タリケル  
藤葉榮衰記云月齋是ヲ聞テ田村勢五六  
百騎催テ松山ノ圍岩瀬衆ニ馳向ヒ兩陣  
互ニ相挑テ戦ケル処ニ須田源次郎十八  
歳ニテ鉢付ノ板ヨリ後ヘツト鉄炮ニテ  
打校レテ討死ス

菱縫板

太平記云 四月三日 島津モ馬ヲ静々ト歩

マセ寄テ矢比ニ成ケレハ先安藝前司三  
人張ニ十二束三伏且シ堅メテ丁ト放ソ  
其矢アヤマタス田中カ右ノ頬前ヲ甲ノ  
菱縫板ノ板ヘ懸テ籠中計射通タリケル  
又云 長崎次郎高重 長崎モヨキ敵ナラハ  
組ニト懸合テ是ヲ見ルニ横山太郎重真  
也サテハアハヌ敵ツト思ケレハ重真ヲ  
弓手ニ相受甲ノ鉢ヲ菱縫板ノ板マテ破著

タリケレハ重真ニツニ成テ失ニケリ

鬼緒

異本保元物語云

友軍もろく  
よきけの糸

清如天皇ト

十代ウラウメニ六人ニシテ此ノウラメニ

のウラメニイハレシガカシクヤメニモウチウリ

チウメニ五代中勢の志ヤシクイハレシウラメニ

ウラメニイハレシウラメニイハレシウラメニ

戸ノ玉乃経人ノのセシ命チウリモウチウリ

そのヨクニヒトシタリウラメニイハレシウラメニ

ウラメニイハレシウラメニイハレシウラメニ

せんしふしつてと流しガめんせんふとと

てはのせいのうけを満ちりるんするは

いふ其しとちりもるいふ思え矢並を

志きりふうひつらういふ甲の跡をいふ

とまをされ云

平治物語云 きよゆり 大証はハツケりの社

糸ののの 杉の枝をわくまのひの袖よして六  
なりそつまふう大由うハさあて々夜ヤせん  
すんしうのののしりそゆあう

平家物語云 教訓 條 いそさ車をとらせ西八條へそ

おりしうつあうまうりあり門のうちう

くしう入道後志をき後ハ 中 其志の衣

御府法因おとは極日居こゆれ居もひし

かき居より旗竿ともしきとあくるの腹帯を

うめ甲の法をしめ峰のうろくすけ

しとあるにハ松及鳥帽を衣に大文の袴の

そはしうさや記入給ハ

その平家物語云 大お念 我ま をしめ

うらおがし ハ かい ハ みくつる水

るうぬかわのそまのやなういほくろひ

をすうそりしう急を洞て時をはく

み云 伊豆必目代 兼降と射條 かけうと開あ すすく 日あ



此は大事をかねりめい之をさふけがふあら  
せ給ハよりける事此心うきまのしりふうまか  
ふものちをちめてはしおあるを云々

源平盛衰記云 八牧夜 討條 関屋是ヲキハテ敵

ノタハカリヲ知スシテ矢ヲ放ケル本意

ナサヨ人ニ詞ヲカケラレテサテ有ヘキ

ニ非ストテ甲ノ緒ヲツヨクシメ三尺五

寸ノ太刀ヲ抜キイツクヘカ落ツヘキ関

屋コハニアリトテニコト笑テ出合タリ

承久記云伊佐山山田カ甲ノ甲ヲツカンテ 三郎行正 次郎重志 本ノマ

引タリケレ共大カナリケレハ甲ノ緒ヲ

フツト引切テ山田ハ延ヌ伊佐被打取ヌ

ハ遺恨ナレ氏甲馬鞍ヲ奪留タレハ伊佐

カ高名トフ申ケル

太平記云 新田義貞 謀叛條 平家モ夜明ハ源氏定

テ寄ンスラン待テ戦ハ利アルヘシト

テ馬ノ腹帯ヲ固メ甲ノ緒ヲ縮相待トシ

忍緒

岡本記云カハヒをきくひんよりくるとい  
多し子をかあともめきくうろろあまはひ  
のをもきくひんもすひはきくした  
條々口傳る

隨兵日記云馬の息ふはくいて祿や甲ハ

左持屋ハもろつ事此方をあへ向て

左の息をもろの中へ入右の息を添へ志

此の息をかくて持へ

勢をたきうこ次弟云かあよの事くれもひろ

あこにすく大くこく替く乃んは又あき

にうりゆにりちてある事もろア一地の

とれたたのゆふち右を志かひの緒を

りちてりちるもろも志め キノマ、 るをくえり

也

別所長治記云

神吉城  
攻條

大手ノ矢藏ノ扉不

殘開カセ年来廿八九ノ男卯ノ花威ノ鎧

キテ甲ヲハ卸テ童ニ持セ皆紅ノ扇開テ

大音アケテ名乗ケルハ當城ノ大將ノ神

吉民部少輔ト云者也別所小三郎ニ頼レ

今日於當城可討死同死スル道ニテモ天

下ノ大將信忠ノ眼前ニテ花ヤカナル軍

シテ剛臆ノ程ニセテ死セシムル武士タル

者ノ本望ナリイテ見參申サント甲ヲ取

テ着シノヒノ緒ヲシメナカラ櫓ヨリヲ

リ大手ノ城戸開カセ究竟ノ兵二百餘騎

前後左右ニ隨ヒ面モフラス切テ出

甲陽軍鑑云信長ノ旗本危も城介及一

文子の旗本信長甲の志此の法を志め

る危八百人あまも難き方とソトも一

一 我々討二條及一揃籠らるる

末森記云川尻ヨリ一里計此方高松ト云

所ニラ利家甲ノ忍ノ緒ヲ強クシメ其ア

マリヲ切テ捨ラレケレハ何モ殿ハ今日

ヲ限リト思召ト見エタリトテ中々生テ

帰ラント思者ハナカリケリ

命緒

叔井日記云氷上宗貞畑牛兵衛守國ハ氷

上家ノ物司ナリ牛函守義カ子ニテ屋形

ノ彈正守廣カ甥ナリコノ男無ルイノ大

剛力ノ勇士ニテ東ニ荒木藤内兵衛西ニ

畑牛兵衛トテ若者ノ手聞ニ申シテ候今

日ヲ最後ト思ヒ入テ命緒ヲ留ノ上帯ヲ

キリ白母衣ノ波ヲク、ミテス、ミテ候



明治十五年八月十日舊稿校正

小野由久

同年九月二日再校并書

青山景通

同年同月十日校合

小野由久

明治十六年十月

窪田鈴太郎  
佐々木泰久

